トップは語る

信越支部

地域力が拓く医療の未来

飯山赤十字病院　院長・産業医　古川 賢一 氏

飯山赤十字病院は長野県北部にあり、近隣の山々はスキーやスノーボードを楽しむ人たちが大勢訪れるウィンターリゾート地でもある。そのため同院では骨折やスキー外傷などに対応するため、整形外科の充実がはかられている。1998年に長野で行われた冬季オリンピックでは、飯山市に隣接する山ノ内町、野沢温泉村が競技会場となったため、選手・スタッフ・観客の医療救護にあたった。2010年に就任した古川賢一院長は、チームでの訪問診療を確立するなど画期的な施策で地域医療の充実をはかり、高齢化が進む地方の病院経営を前向きに進めている。

ふるかわ けんいち／1947年生。信州大学医学部卒業。1972年信州大学第2内科学教室入局。1978年飯山赤十字病院第1内科部長・医療社会事業部長、2004年副院長を経て、2010年院長に就任。現在は内科一般の診療とともに訪問診療に従事し、医療圏内での完結型医療をめざして積極的に地域医療連携に取り組んでいる。四季折々に変化する豊かな自然を有するこの地で生まれ育ち、美しい風景がもたらす精神的な癒しも治療の一環だと語る。

飯山赤十字病院

- ●所在地：〒389-2295 長野県飯山市飯山226-1
- ●TEL：0269-62-4195 http://www.iiyama.jrc.or.jp/
- ●設立：1953（昭和28）年
- ●病床数：300床
- ●診療科：内科・精神科・神経内科・呼吸器科・循環器科・小児科・外科・整形外科・形成外科・脳神経外科・皮膚科・泌尿器科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・放射線科・リハビリテーション科・消化器科・心療内科

地域特性を考慮し医療圏内での完結型医療をめざす

当院が位置する飯山市は、長野県では最北端の医療圏である「北信医療圏」に属しています。この地域は豊かな自然風土を有しますが、日本有数の豪雪地帯であり、過疎化も進んでいます。このような環境の中で地域医療をどのように展開するかは住民にとって非常に重要な事柄と言えます。

私が院長に就任した時に率先して進めたのは、この医療圏内で完結する医療体制をどう構築していくかということです。北信医療圏の人口は約93,000人。長野市や松本市といった都市部から離れているため、医療圏内で治療を完結させることが望ましいのですが、診療所の数が少ない上に、病院は当院を含め3病院しかありません。この少ない医療資源をどのように有効に機能させていくことができるかが地域医療の大きなポイントとなるのです。そこで、最初に私が手がけたのは病院どうしの緊密な連携です。隣の市にある北信総合病院と協力し、まずは急性期の患者さんについて、できる限りこの2つの病院で対処し治療を完結していこうという体系を結んだのです。

例えば、北信総合病院は心臓血管外科、循環器内科が充実していますから、心筋梗塞といった循環器の救急疾患の患者さんをお願いし、当院では骨折や脊椎損傷など整形外科分野を引き受けるなど、疾病の種類によって救急患者さんの受け持ちを決めています。また状況に応じて、北信総合病院に入院していた患者さんの在宅医療をこちらで受け入れるなど、臨機応変な対応を行っています。「医療圏内での治療の完結をめざす」という同じ志のもと、非常にスムーズな連携が実現できています。

疾病状態のステージ　参考

急性期	症状や徴候の発現が急激で、緊急・重症な状態にある時期
亜急性期	急性期の段階を過ぎて症状が安定し、リハビリや退院支援を行う段階にある時期
回復期	急性期の段階から脱し、身体機能の回復をはかる状態にある時期
慢性期	症状や徴候は激しくないが、治癒することが困難な状態が長期にわたって持続する時期
終末期（ターミナル）	病気が治癒する可能性がなく、数週間から半年程度で死を迎えることが予想される時期

訪問診療チームが実現する病棟と同等の厚い医療

医療圏内で治療を完結させるためには、急性期医療の対応だけではなく、回復期のリハビリや退院後の自宅療養の支援など、疾病のプロセス全般にわたって支援できる体制が必要です。医療施設が少ないこともあり、当院においても回復期リハビリテーション病棟、訪問看護ステーションを備え、急性期だけではなく、回復期や慢性期の患者さんへの対応を行っています。

なかでも20年前から取り組んでいる訪問診療は、医師や看護師はもちろんのこと、薬剤師、理学療法士、作業療法士、メディカルソーシャルワーカーがチームとなり訪問するという独自のスタイルで患者さんの診療にあたっています。現在、約80名の在宅の患者さんを診ておりますが、24時間365日の対応を基本に、病棟と同等の厚い医療を在宅で実現する、後方の病棟であるという気持ちで診療に臨んでいます。

訪問診療チームは毎朝15分のミニ・ケアカンファレンスを行い、当日の訪問患者さんの確認、状態報告、当日の予定確認などの情報交換を行います。さらに毎週月曜日には2時間のケアカンファレンスを行い、院外のケアマネージャや介護士、ヘルパーにも参加してもらい、その週に訪問する患者さんの対応を話し合います。

当院のチームによる訪問診療の大きな特徴は、それぞれの医療スタッフがその専門能力を十分に発揮して診療にあたっている点

です。チーム体制に至った背景は訪問看護師の負担の大きさにありました。看護師は医療処置やバイタルチェック、褥瘡（じょくそう）（床ずれ）管理といった看護業務に加え、投薬からリハビリまで考えなければならず、患者さんと向き合うというよりは膨大なノルマをこなしているという状況だったのです。そこで、薬のことは薬剤師がすべて責任を持って対処する、理学療法士や作業療法士が参加して患者さんにとって適切なリハビリを実行する、というように各業務を専門スタッフに振り分けることができる多職種チームで患者さんを診る体制をつくったのです。

これによって看護師の負担が減ったばかりでなく、それぞれのスタッフがやりがいを持って積極的な治療提案を行うようになりました。そうした中で、投薬の量を減らして患者さんの負担を軽減したり、リハビリの成果が目に見えてあらわれたりと、治療におけるメリットが増えていったのです。

訪問診療専任の看護師8名は、「受け持ち看護師」として患者さんを継続的に担当し、患者さんのご家族とも話し合いながら、ターミナルケアにも対応します。知識や経験が豊富ですが、それに安住せず、常にスキルアップをめざす積極性を持っています。看護に専念できること、患者さんをまかされているという自負がやりがいを生んでいるのだと思います。薬剤師やリハビリスタッフも同様で、自分たちの専門能力を発揮できる場としてさまざまに努力を続けています。スタッフがお互い刺激しあいながら、チーム力を高めているのです。このように専門的な各業務が高いレベルで実行されることにより、医師の負担は大いに軽減されているのです。

様変わりする医療ニーズに対応するための体制づくり

団塊世代が75歳以上の後期高齢者となる2025年を引き合いに、2025年問題と称され、高齢人口の増加による医療・介護のリスクが叫ばれています。今後、超高齢化社会の中で在宅医療のニーズが増える中、医師不足の解消が急務であるとして大きな課題となっています。

ここ北信医療圏は長野県の平均よりも高齢化率の高い自治体が多く、なおかつ病院や診療所が少ない環境にあり、そういう意味では将来の日本における高齢化の縮図とも言えます。そこで感じるのは「治す医療」から「支える医療」に確実にシフトしてきているということ。その中で当院のチームでの訪問診療が定着し、一定の成果を上げてきていることは、一つのモデルケースとして参考にしていただけるのではないかと自負しています。

当院に限らず、過疎が進む地域においては、医師不足、医療スタッフ不足は常なる課題ですが、医療施設自身の工夫により解消できることも多いのではないかと考えています。

例えば当院には、長く第一線で活躍し、次の医師人生として自然豊かなこの地を選択したという医師が数名おります。医師の価値観もさまざまです。当院では募集する医師の年齢制限は設けていませんし、ベテランの医師が着任するチャンスを広げています。

また、現在当院には約400名の職員がおりますが、係長以上は年に一度、私との個人面談を実施しています。全体の会議などではなかなか発言できないことも、1対1だと、オープンに話してくれることが多く、そこからアイデアをもらったり、組織づくりの参考にさせてもらったりしています。上に立つものとして、個人の意見を尊重し、能力を発揮できる場を提供するという姿勢を持ち続けることが非常に大切だと考えています。

本質的な医療の価値を問い、新たな可能性を模索する

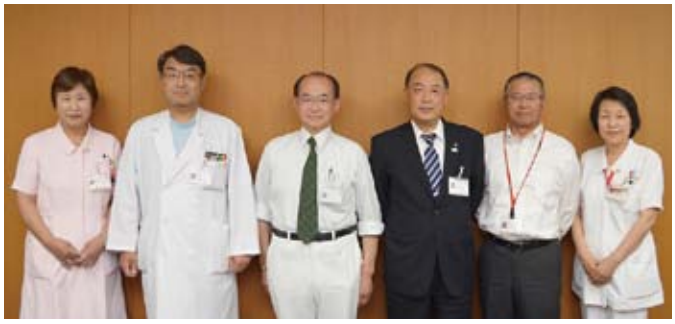
チーム制の訪問診療が特色となって、当院には毎年10名近い研修医が地域医療の研修に訪れています。今後重要度を増す在宅医療のポイントとともに、医療資源が少ない地域だからこそ、お互いが慮って緊密な医療連携を確立できるという点も学んでほしいと思っています。

現在当院では、さらなる地域医療の充実をはかるため、病棟の再編成を進めています。まず亜急性期の患者さんのケアを行う「地域包括ケア病棟」をつくる予定です。これができることで、急性期から、亜急性期、回復期リハビリテーション、訪問診療という一連の流れで包括的に患者さんをケアしていくことができます。慢性期医療を手がけるかどうかは今後の課題ですが、いずれにしろ、診療所が不足している分、その役割を病院が担っていかなければいけないと考えています。

新たな可能性にも挑戦しています。その一つが森林浴とタイアップした人間ドックです。飯山市は国土緑化推進機構が認定する「森林セラピー®基地」に認定されており、森林浴でリラックスしながら健康チェックをするというプランを考えました。2015年、金沢まで開通する北陸新幹線が飯山駅を経由しますので、手軽に行けて癒されるメディカルツアーとしてアピールできればと願っています。

また、職員のアイデアを取り入れ、2012年から月に一度「動物ふれあい広場」と名付けたアニマルセラピーを実施しています。イヌやネコ、ウサギなどとふれあうことで、入院患者さんがとても生き生きとした表情を見せ、動物のパワーを感じるひとときです。

医療資源が少ない地域ではありますが、医療の質は高く、特に在宅医療に関しては充実しており、安心して老後を迎えられる、という地域医療をめざしています。患者さんには「この地域に住んでいて良かった」と思われるような医療を展開し、そして職員には「ここに勤務して良かった」と思われるような病院にすることが私の究極の目標です。



ともに働くスタッフの方々と

トップは語る こぼれ話はウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/
eふぁみり
生まれ故郷の美しい自然を愛する古川院長。ヴィオラ奏者としての横顔をご紹介。